



ウミネコ成鳥(左)と第2回冬羽(右)。全長は46cmとユリカモメより一回り大きい。成鳥になるまでに4年かかる。ネコのようミャーオと鳴くのが名前の由来。日本周辺の島嶼で繁殖し、四日市には6月～翌年2月に渡来する。



カモメの成鳥冬羽(左)と幼羽から第1回冬羽に換羽中の個体(右)。全長は45cmほどでウミネコとほぼ同じ大きさ。成鳥になるまでに3年かかる。



セグロカモメの成鳥冬羽(左)と第1回冬羽(右)。全長は65cm前後と大型のカモメ。フワフワと大きな声で鳴く。成鳥になるまでに5年かかる。繁殖地はロシア北部。第1回冬羽は初列風切が黒く、突出する。



オオセグロカモメの成鳥冬羽(左)と第1回冬羽(右)。全長は65cm前後でセグロカモメとほぼ同じ。鳴き声もよく似ている。成鳥まで5年かかる。青森県からカムチャツカ半島にかけて繁殖する。第1回冬羽では初列風切が暗褐色でバフ縁がある(↓)。



セグロカモメとニシセグロカモメの交雑と思われる個体。背はオオセグロカモメに次いで濃く、足は黄色味を帯びる。

クロトウヅクカモメは全長45cm。中央の尾羽が突出する。他の水鳥から餌を奪う。市域では珍しい。



河口や海上の野鳥

鈴鹿川本川・派川河口や付近の海上には多くの種類の野鳥が集まります。ここでは、カモメ類、シギ・チドリ類以外の野鳥を紹介します。



鈴鹿川本川河口沖に集まつたスズガモとホシハジロを中心とした混群。キンクロハジロやカンムリカツブリが混じる。以前は1万羽近くの大群が渡来したが、群れサイズは年々小さくなっている。この写真は2016年1月の撮影。



ヨシガモは全長48cm。写真の雌は嘴が黒い以外特徴がなく、見過ごされやすい。雄は第2集P58参照。



ウミアイサ(上の左は雌、右は雄)は全長55cmあり、冬鳥として渡来する。右中は水中の餌を探しながら泳ぐ雄。主に魚を捕食するため鋸状の板歯がある(右下)。



スズガモ(左上雄、左雌)は全長45cmあり、冬鳥として群れで渡来する。雄は背まで白く、雌は嘴基部の白斑が目立つ。主に貝を食べる。



セイゴを捕えたダイサギ。全長は90cmあり、シラサギの中では一番大きい。



ホシハジロ(左雄、右雌)は全長45cmあり冬鳥として渡来する。潜水して貝や甲殻類などを食べる。雄だけ虹彩が赤い。



コクガン【VU】は全長61cmあり、冬鳥として少数が渡来する。雌雄同色で、写真は成鳥。主に海藻を好んで食べる。



ツクシガモは全長62cmあり、雌雄ほぼ同色。冬鳥として西日本を中心に渡来する。レッドリストの記載はないが、希少な種類。



ヒドリガモ(左雄成鳥、右雌成鳥)は全長48cmあり、冬鳥として渡来する。主にアナアオサなどの海藻を食べる。雄はピューンと大きな声で鳴き、雌はグアと鳴く。



オナガガモ(左は雌成鳥、右は雄成鳥)は冬鳥として渡来する。他のカモ類に比べて中央の尾羽が長い。全長は雄75cm、雌53cm。雄のエクリップスは雌に似るが、嘴には青灰色の部分がある。



ハジロカイツブリ(左上冬羽、左下成鳥夏羽)は全長31cmある冬鳥。鈴鹿川河口でよく見られる。嘴はやや上に反る。カイツブリ類はどの種も雌雄同色。潜水が得意で、主に魚を食べる。ピーと鳴く。上は一斉に潜水を始めた群れ。



カンムリカイツブリ(上冬羽、左成鳥夏羽)は全長56cmある冬鳥。海上に渡来し、潜って魚を捕える。クワックワッと鳴く。滋賀県以北では繁殖するが、移動せずに夏羽の状態で越夏する個体もある。



海上を一列に飛ぶウミスズメ【EN】。全長は26cmあり、冬鳥として渡来する。喉が黒い個体は成鳥夏羽。近年、目にする機会は少ない。

ササゴイ【VU】の幼鳥は成鳥(第2集P10参照)よりも黒褐色味が強い。全長は50cm。巣立ちした7月後半から8月に見られ、その後東南アジアへ渡る。



高松海岸に集結して休むカワウの大群。本種は1980年頃までは、三重県ではほとんど見かけなかったが、1990年代から急増した。三重県にもコロニーはあるが、市域に飛来する個体の多くは弥富のコロニーからと思われる。魚なら何でも大量に食べるので、アユ釣りの盛んな河川では駆除もされている。



大きなクロダイを捕えたカワウ。飲み込もうと悪戦苦闘したが、さすがにここまで大きくては放棄した。鵜飼に使われるウミウの近縁だけあって、魚を捕える俊敏さは相当なもの。

十数列の帯をなし飛来するカワウの大群。この数になると威圧感を感じる。



アジサシは全長35cmあり、コアジサシより2回りほど大きい。旅鳥として渡来し、以前は100羽単位の群れも見られたが、近年激減している。



シマアジの雄の繁殖羽(上)は白い眉斑が特徴的。旅鳥として渡来し、全長は39cmとコガモに近い。9月中旬から10月頃は雌(左)や幼鳥は嘴の根元に淡色斑があるが、コガモの雌と識別は難しい。



アメリカヒドリは全長48cmあり、少数が冬鳥として渡来する。写真の雄は頭部に緑帯があり、胸はブドウ色を帯びる。雌はヒドリガモの雌に似るが、顔の灰色味が強い。ヒドリガモとの雑種も多い。



オオミズナギドリは全長は48cmだが翼が非常に長い。伊勢湾には秋に訪れ、海面すれすれをソアリングする。時に大群になるが、近年は少ない。



コラム 野鳥の釣針禍

写真のシロチドリは、釣り人が捨てていったゴカイの付いた釣針を飲み込んで保護されたもの。始めは生きていたが、すぐに息を引き取った。釣針は野鳥にとっての凶器であることを釣り人は認識し、ゴミは必ず持ち帰るというマナーを守ってもらいたいものです。



下水処理場の排水に集まるダイサギ、アオサギ、コサギ、カワウ、オカヨシガモ、ホシハジロ、コガモ、ヒドリガモの混群。餌のある所でしか生物は生きていけない事を物語る光景。



イソヒヨドリの雄成鳥(上)と雌成鳥(左)。全長25cmあり、普段は海岸付近にいるが、倉庫の屋根などで繁殖する留鳥。昆虫や木の実を食べる。囀りは複雑な美声。



キンクロハジロ(左写真の左は雄成鳥、右は雌成鳥)は全長45cm。冬鳥として渡来する。虹彩は金色。潜水して貝や甲殻類を食べる。近年、渡来数が減っている。上の写真は、風のいたずらで別種のように見える雄。



ホオジロガモ(左は雄成鳥、上は雌成鳥)は全長45cmあり、冬鳥として沖合に渡来する。雄の第1回冬羽は雌に似るが、嘴の橙色斑がない。虹彩は雄では金色、雌では白色。潜って貝類や節足動物などの動物質のものを食べる。市域に渡来する個体数は多くない。



マガモ(左雄成鳥、右雌成鳥)は全長60cmあり、冬鳥として渡来する。雌はオカヨシガモの雌(第2集P58)に似るが翼鏡は白くない。

トモエガモ【EN】の雄成鳥。全長は40cmあり、内陸の湖沼に入ることが多いが、海にも渡来する。近年、ほとんど目に見る機会がない。



アオサギ(左は飛翔、右は成鳥)は全長95cmあり、日本のサギ類では最大。高木の高所にコロニーをつくると繁殖する留鳥。魚類を中心に動物質のものを食べる。幼鳥は頭部のコントラストが鈍い。大きな声でゴワツと鳴く。



カラシラサギは全長66cmあり、稀な旅鳥として渡来する。コサギと同じように足指は黄色いが、嘴は黄色(左)。頭を横にずらした独特的のポーズ(上)で素早く魚を捕える。



タヒバリ(左、右)は全長16cmのセキレイの仲間。冬鳥として海岸近くに多いが、内陸部の水田にも入る。ビンズイに似るが、生息環境が異なる。ズイツという鳴き声以外は認識しにくい。



ユキホオジロは全長16cmの迷鳥。写真は雄第1回冬羽。普通は北海道に冬鳥として渡来する。この時はネット情報につられて関西から関東ナンバーまでの車が押し寄せた。ネットに情報を流すのは、迷鳥が飛去してからがマナーというもの。



ミミカイツブリは全長33cmあり、少數が冬鳥として海上に渡来する。頭部の白黒の境界線がほぼ直線になり、ハジロカイツブリと区別できる。写真は冬羽。



ボラの子ハクを捕えたコサギ(左上)。右は捕えたエビを器用に咥え直すコサギ。全長は60cmあり、多くは夏鳥で、一部は留鳥。婚姻色が出ると眼先はピンク色になる。

クロガモの雄冬羽。全長は48cm。嘴基部の橙黄色のこぶが特徴。雌は頭部の眼から下が白っぽい。鈴鹿川河口のスズガモの大群の中に混じって少数が冬鳥として渡来する。

旧養魚池周辺の生き物



磯津や吉崎周辺には、かつてウナギの養殖に使われた養魚池が残っています。池の周囲はヨシや低木が生い茂り、人が立ち入ることができないので、野鳥などの絶好の生息地となっています。しかし、人の役に立たない場所として、次々と埋め立てられてソーラーなどに姿を変えています。



バンは全長32cmの留鳥。水辺の草むらの中に巣をつくり、10卵ほどを産む。孵化したヒナは真っ黒でよく走る。幼鳥がヘルパーをするので有名。写真は第1回冬羽だが、成鳥になると嘴の根元は真っ赤になる。近年、著しく減少している。

ハシビロガモ(左は雄成鳥、下は雌成鳥)は全長50cmあり、冬鳥として溜池などに渡来する。名前の通り、嘴の幅が広い。集団で円を描くように泳ぎながら(上)、水面のプランクトンなどを食べる。



セッカは全長12.5cmの漂鳥または一部留鳥。尾羽の先端は白く、その内側に黒帯がある(左)。右写真のように枯草やクモの糸を使って草むらの中層に巣を作る。繁殖期には、上昇しながらヒッヒッヒッヒッと鳴き、下降するときはチャチャツ チャチャツと鳴く。地鳴きはチュツ。



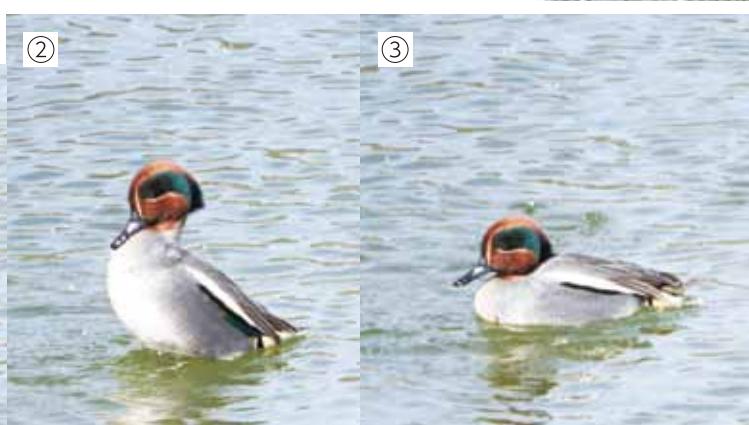
ミシシッピアカミミガメは縁日でミドリガメとして売られていたものが捨てられたもの。河川の下流域では自然繁殖し、数を増やしている。



クサガメは首にある黄色の斑紋が特徴。ミシシッピアカミミガメと生息環境が重なり、市域ではもうほとんど姿を見ない。

コガモのディスプレー

①



コガモは冬鳥だが、2月の下旬頃から雄が雌に対してディスプレー(求愛行動)を始める。まず、体を起こし嘴を下にして水を跳ねる①。次に頭を上げ②、元の姿勢に戻る③。そしてまた嘴をひねるように水を飛ばし④、また元の姿勢に戻る⑤。①～④では水滴が飛んでいる。①～⑤までの時間は1.5秒程度。⑤から2秒ほど間を空けて最後に翼と尾羽をピンと上げる⑥。



カツブリの生活

カツブリは全長27cm程あり、一年中見られる留鳥または漂鳥です。潜水が得意で、魚や甲殻類などを捕えて食べます。旧養魚池やため池に浮巣を作って繁殖します。飛ぶこともできますが、夜間に渡るようで飛ぶ姿を見ることはめったにありません。



水を蹴立てるように水面を走る成鳥。右の個体は逃げる様子もないで、求愛行動と思われる。



カツブリの成鳥夏羽。雌雄同色。虹彩は淡黄色、嘴の基部の黄斑も目立つ。ピッと鳴き、繁殖期にはキイリリリリリリーという声も発する。



巣はヨシの茎を足場にして、ヨシの枯れ枝や葉などを積み上げて作られる。長径38mmの卵を3~6卵産む。卵は白色だが、次第に淡褐色に汚れていく。警戒心は非常に強く、親鳥が巣を離れる時は巣材で卵を隠す。抱卵期間は3週間ほど。繁殖に失敗すると夏ごろまで卵を産み直す。



孵化した雛は体に縞模様があり、嘴は薄いピンク色。すぐに泳ぐことができるが、しばらくは巣で給餌を受ける。1週間ほどすると親子で泳ぎ出し、雛は疲れると親鳥の尾羽の脇から背中に這い上がる。何とも微笑ましい光景。時に、雛を背負ったまま潜ることもある。

無事成長して第1回冬羽になった幼鳥。縞模様は無いが、嘴基部の黄斑はまだはつきりしない。



孵化後、1か月程経過して親鳥よりも大きくなった雛(左)。大きな魚を飲み込もうとしているが、この魚も自分で捕えたもの。



ツルシギの成鳥冬羽から夏羽への換羽中

コラム 淡水性シギの将来

今、野鳥たちの中で出会う可能性が最も減ってきてている種類の中に、ツルシギ、タカブシギ、ウズラシギ、キリアイ、コアオアシシギ、オジロトウネンなどの淡水性のシギが挙げられます。これらの種類は、海岸に近い浅い池のような環境を好むので、そうした環境がもう無いことが最大の原因です。楠町にある旧養魚池も次々に埋め立てられていきますが、これらの池を整備して淡水性のシギに好ましい環境を創るか、農家に理解を求めて、稻刈り後の水田に水を張るような取り組みをしないと近い将来、これらの種類は完全に消えてしまうことが予想されます。淡水性のシギは人気が高いので、もし渡来地ができれば、観光の目玉になるかもしれません。

海辺の猛禽類

海岸付近では魚を捕食するミサゴやヨシ原に依存したチュウヒなどの猛禽類を見ることがあります。海岸は見通しがよく大型の鳥なので、特徴をつかめば案外簡単に観察することができます。



ミサゴの雄成鳥。全長は54cm。胸の褐色は薄い。テトラポッドに突き刺さった流木をお気に入りの止まり場としている。



上空から獲物を探すミサゴの雌成鳥。全長は64cmと雄より大きく、胸にはっきりと褐色部分がある。飛びながらピョツピョツと鳴く。



三田町上空を舞う5羽のチュウヒ。

上空から獲物を探すチュウヒ【繁殖CR 越冬VU】の雄成鳥。全長は雄が46cm、雌が56cmほど。ホバリングすることもでき、ネズミや小鳥類、カエルなどを捕食する。ヨシ原の上を飛ぶことが多く、三田町は貴重な生息地。繁殖期に見られる場合もあるので、繁殖している可能性もある。ヨシ原の地上で営巣する。



ヨシ原の低空を浅いV字形で飛ぶチュウヒの雌成鳥。

チュウヒの幼鳥は頭部が白っぽいので分かりやすい。



ホバリングしながら獲物を探すチョウゲンボウ雄成鳥。全長は33cm。尾羽を全開にし、小翼羽も広げている。



飛翔するハヤブサ【越冬EN】(上)と幼鳥(右)。全長は雄が43cm、雌が50cmほど。三重県南部の断崖などでは繁殖するが、市域では冬鳥。飛翔時は翼の先が尖り、チョウゲンボウより翼の幅が広い。内陸部でも見かける場合がある。ハトやカモなどを狩り、急降下するスピードは相当なもの。

富洲原の底曳網漁

富洲原漁港では、春から年末までの木曜と日曜に底曳網の漁船が出漁します(天候により中止あり)。11時頃に漁船が戻って来ると、一般市民も買うことができます。ガザミやエビ類、マゴチなど売れるもの以外にもゴミとして扱われる珍しい生き物も混ざっています。



帰港する底曳網漁船。



漁獲物が次々と陸揚げされる。



イシガレイは大きくなると40cmを越える。骨質板という固い部分が2列ある。写真では上側にあたる。



エビ類はkg単位で測って値がつけられる。



キチヌはキビレとも呼ばれ、クロダイに似るが、尻鰭や尾鰭に黄色い部分がある。大きくなると40cmを越えるが、数は少ない。



ヒラメは言わずと知れた高級魚。正面から見て眼が左側にある。



ハモは鋭い歯がある。関西では吸い物などに珍重される。数は獲れない。



クロウシノシタは腹側の黒い鰭が特徴。名前の「牛の舌」は形の通り。



クルマエビも高級なエビ。縞模様があって分かりやすい。尾扇の先の青色が美しい。



ヨシエビはやや赤みのある体とまっすぐな額角が特徴。地元ではガンサと呼ばれ、高級なエビ。



シバエビは体長15cmになり、黄色味を帯びた体に青黒い細かな斑点がある。額角は水平に伸びる。



サルエビは体長5~8cmほどの個体が多く、アカシャエビとも呼ばれる。額角は短くて上に反る。



クロダイとマゴチ(上)。両種とも大きくなると50cmを越える。近年、マゴチは増えている。



青く派手な台湾ガザミとガザミ。ガザミはワタリガニと呼ばれ、主要な漁獲物。大きな個体は高値で取引される。台湾ガザミが混ざる割合は少ない。



シャコも重要な漁獲物。茹^ゆでて、寿司ネタにされる。尾肢には赤、青、黄色が入る。



クマエビは体長22cmになる特大のエビ。獲れる量が少ないので、他のエビのおまけ的な存在。別名アシアカ。



アカハゼは深場の泥底に生息している。あごの下に3対のヒゲがある。



マコガレイにはイシガレイのような硬い部分はない。漁獲量が少ないが、おいしい魚。



フトミゾエビは腹部に暗色斑があり、尾扇は青い。漁獲量は少ない。

ミミイカは量が少ないので、漁師さんの自家消費に回される。



ネズミゴチには近似種が何種かある。背鰭の模様が決め手になる。てんぷらにするととてもおいしい。



アカシタビラメの一種は、量が少なくクロウシノシタと混ぜて売られることもある。



シログチも獲れる量が少なく、ほとんど出回らない。



メイタガレイは眼の間にある突起に触ると痛いことから名づけられている。漁獲量は少ない。

底曳網漁の混獲物



ギマはフグ目魚類としては珍しく、尾鰭は二叉になる。第一背鰭と腹鰭はトゲ状。



シロギスは、てんぱらにするととてもおいしい魚。しかし、数や大きさがそろわない。



ヒメオコゼは体長12cmほどの珍しい魚。背鰭や尾鰭に縞模様がある。



ヒガングフグは大きくなると30cmになる。毒があるので調理には免許が必要。海底の砂に潜る習性がある。



トカゲエソは体長30cmになる。すり身の材料になるが、数がそろわないで価値はない。



イトヒキハゼは体長8cmほどのハゼ。体に褐色の横帯がある。テッポウエビ類の巣に共生する。



シロザメは体長が1mを越える。卵胎生で、右は腹から出てきた仔魚。全部で12匹出てきて、海に放流された。



イタヤガイは水深10m以上の砂泥底に生息する。右殻はよくふくらみ白色。左殻(上2つ)はほぼ扁平で、放射肋は8~10本。



アカニシの殻口は橙色や赤色を帯びる。殻高10cm以上になり食用になるが、数がそろわない。右下のアカガイも同様。





トゲノコギリガザミ
【NT】は甲幅が20cmにもなる巨大なカニ。食用とされるが、数は獲れない。



シマイシガニは甲幅15cm。甲の模様が特徴的。非常に珍しい種類。



イシガニは甲幅7cmほどしかなく、ガザミのような価値はないが、出汁を取るぐらいには使える。



マルバガニは甲幅4cm。甲にある2紋とハサミにある軟毛が特徴。深場の砂泥底にすむ。食用にならないので捨てられる。個体数が多い。



ケブカエンコウガニは甲幅3cm。甲やハサミは毛に覆われている。深場の泥底にすむ。



オニテツポウエビは体長5cm。縞模様が特徴的。潮間帯の砂地に穴を掘り、ハゼ科の魚と共生する。



ウミエラカニダマシは甲長10mm。水深20~30mの海底でウミエラ類に付着している。雌雄1対で生活することが多い。ウミエラは原始的な腔腸動物の仲間。



モミジガイはきれいな星形をしたヒトデの仲間。全体の幅は13cm。砂中の小動物を餌とする。



ウミサボテンは腔腸動物に属し、海底の砂泥底に写真左側を埋没させている。群体は2型の多数のポリップから成り、昼間は縮み、夜間には50cmに伸びる。



オカメベンブクは長径3cmのウニの仲間。砂中に潜る。干潟にいることもある。

ハゼの仲間

河口や干潟にはハゼの仲間が見られます。ぱっと見だけでは識別が難しい種類が多いですが、鰓を広げると繊細な色彩があり、とても魅力的です。しかし、多くの種類が激減しています。



マハゼはハゼの仲間では大きくなり、全長20cmを越える。内湾の砂泥底に生息し、ハゼ釣りの対象としてなじみ深いが、主にゴカイやヨコエビ類などを食べるのと、近年著しく減少している。



ビリングスは全長7cmになり、河口域から下流域に生息する。主に動物食性で、底生動物を食べる。マハゼの稚魚に似るが、下あごが突出する。成熟した雌は鰓が黒化する。春にアナジャコなど他の動物が掘った穴の側面に産卵する。



アシクロハゼ【VU】の雄(左上)と雌(右上)。全長は7cmほどになる。雄は第1背鰭が糸状に伸び、体側に白色の横帯がある。雌は第1背鰭に黒斑がある。汽水域の砂底から砂礫底に生息し、塩分濃度の変化に順応性がある。5~9月に、貝殻や石の下に雄が巣を作り、産み付けられた卵は雄が保護する。



ヒモハゼ【NT】は全長7cmほどになり、体が細長くとてもハゼの仲間とは思えない。体側に1本の太い暗色縦帯がある。河口域の砂泥底を好み、アナジャコなどの巣穴を生息場や産卵場として利用する。繁殖期は5~8月。



アベハゼは全長4cmほどのずんぐりして黒っぽいハゼ。成魚では雄の第一背鰭は糸状に伸びる。体には斑模様があり、尾鰭の黒色縦線が目立つ。尻鰭の縁は水色に輝く。汚濁した水質にも耐えられる。繁殖期は4~8月。

トビハゼ【CR】は全長12cmになり、内湾の泥質干潟に生息する。眼は上方に突出し、間隔が狭い。干潟で活動する水陸両生魚。陸の上では主に皮膚呼吸をする。水に入るのを嫌い、水面を跳ねて移動する。雄が泥中に巣を掘るが、深い泥質干潟はほぼ消失しているので、絶滅寸前の状態。



ミミズハゼは8cmになり、河口域の転石の下に生息する。頭は小さく扁平。動きは非常に敏捷。ヨコエビ類などの小動物を食べる。繁殖期は春で、カキ殻の裏などに産卵する。



チチブの雌(左)と雄(右)。成魚では10cmになり、胸鰭のつけ根に三日月形の黄斑がある。雄の第1背鰭は長く伸びる。汽水域のカキ殻や石の隙間に生息する。



ヌマチチブは成魚で12cmになり、チチブに似るが顔の斑点がまばら。幼魚(左)は尻鰭などが水色に輝く。成魚(上)では胸鰭つけ根の黄斑の中に橙色線がある。汽水域から河川の下流に生息し、チチブよりも上流側に分布する傾向がある。転石が多い場所を好む。雑食性で、主に付着藻類やエビなどを食べる。春から夏に転石の下に産卵する。

コラム 海の豊かさとは

みなさんは「豊かな海」と言われてどのような海を想像しますか。リゾート地に見られるような透き通った海を想像されるかもしれません。今、私たちの海は、昔と比べて比較的きれいな水質になっていますが、近年、アサリやシラスウナギが獲れない、コウナゴは6年連続で禁漁となるなど、海の生き物が減少し、漁業にも影響を与えているという現状があります。

生き物が減少している一因として、窒素やリンといった陸から海に流れる栄養塩類が不足する貧栄養化があげられます。魚が食べる餌となる海藻や植物プランクトンにとって、栄養塩類は生育に不可欠であることから、「豊かな生態系を保った海」のためにはこの栄養塩類が重要となります。そのため、国等では、特定の海域への栄養塩類供給を可能にし、海域及び季節ごとに栄養塩類のきめ細かな管理を行えるように試みています。

しかし、一方で窒素やリンは量が多くなると富栄養となり、赤潮や青潮の原因になってしまふため、法律で水質の濃度規制がなされています。

多様な生物を育み、漁業も盛んになるような海こそ「豊かな海」であるといえます。みなさんも海に出かけ、干潟の様子やそこに住む生物の種類や数、どんな漂着物があるか、釣れる魚、漁港の水揚げがどう変わってきたのかなどに目を向けながら、海の変化に気づける人になってほしいと思います。

沿岸の魚介類

伊勢湾沿岸には様々な魚が生息しています。店で売られていたり、釣りの対象となったりする魚は割合知られていますが、一見地味な見慣れない種類もあります。



クロダイは釣り人の間ではチヌと呼ばれ、人気がある。成長すると60cmを越える。岩壁やテトラポッドなど餌となる付着物の多い海域に生息する。カニ類、ムラサキイガイ、イソギンチャク、フジツボなどを食べる。



スズキは大きくなると80cmを越える。30cm以下をセイゴ、40～60cmくらいの個体をマダカと呼ぶ。小魚やゴカイ類を好んで食べる。



マアナゴは大きくなると80cmくらいになり、重要な漁獲物。砂泥底を好むが海の環境変化に伴い、近年減少が著しい。



クジメは岩場に生息し、大きくなると30cmほどになる。煮つけなどでおいしい魚だが、近年はあまり目にすることがない。



シロメバルは胸鰭の条数が17と近縁のメバル類より多い。テトラポッド周辺の夜釣りで釣れる。



マダコは大きな個体では3kgを越える。眼は人の眼に近い構造で、立体視ができる。海の靈長類とも言われるくらい頭がいい。近年、餌となるガザミやイシガニが増えている関係で増加している。



メジナはグレとも呼ばれ、釣魚として人気がある。食べても美味だが、木の葉サイズの小さいものしか釣れない。



サッパは夏場のサビキ釣りで釣れる平たい魚。食べられる魚だが、鱗の処理が面倒。



釣り上げられて膨らむクサフグ。これも身を守る手段。胸鰭の後ろと背鰭のつけ根の黒斑が特徴。初夏の夕方に集団産卵する。生命力が強く、他の魚がいない海域でも生き残る。



ヒイラギは15cmほどになり、ゼンメとも呼ばれる。生きている時は体が青白く光って美しい。時々売られていて、煮つけなどでおいしい。

ムラソイはカサゴに似るが、眼の下にある黒い線と胸鰭の前にある暗色斑が特徴。煮つけなどに適している。





シマイサキは黒い
縦縞が特徴。成魚は25cmになる。浮き袋から
グーグーと音を
出す。幼魚は海藻
の隙間に隠れて
いて、興奮すると
黒化する。



ギンポ^{せひれ}は岩場に生息し、大きくなると30cmになる。^{せひれ}背鰭のつけ根に並ぶ暗色斑が特徴。卵塊に雄が体を巻きつけて孵化するまで守る。身はてんぷらにすると美味。



ダツはサヨリやサンマに近いダツ目の細長い魚。写真の幼魚は15cmほどだが、成長すると70cmを越える。以前には伊勢湾で見られなかった種類。



ガンテンイシヨウジはタツノオトシゴに近く、雌が雄の育児嚢^{のう}に産卵し、雄が稚魚を出産する。全長16cmになり、内湾部の河口域に生息する。



マサバはよく知られた重要な食用魚。年により大発生するが、あまり大きくはなれない。店で売られているサバの多くは、背の斑紋が粗い北大西洋産。



タケノコメバルは岩場に生息し、成長すると40cmを越える。体に大きな暗色斑がある。



クロサギの幼魚は夏から秋に干潟の
かおりじ
瀧筋で育つ。成長すると15cmになる。



アオリイカは釣り人に人気がある。^{がいとう}外套長45cmになる。体に多数ある色素胞を収縮、拡大させて瞬時に色を変えることができる。初夏に産卵する。



アカエイは成長すると80cmほどになる。尾に毒針があり、絶対に触ってはいけない。目のように見えるのは鼻孔、5対あるのは鰓孔。2016年頃にすごく増えたが、近年は餌の貝が減って減少している。



コラム ウオノコバン

この写真はマサバに外部寄生するウオノコバン属の一種です。体長は4cmほどで、鉤状の脚でしっかりと体に食い込んでいます。種類により寄生する部位は異なります。成長に合わせて雄から雌に性転換し、産卵された卵はマンカ幼生となって寄主に取り付けます。手のない魚にとって、迷惑この上ない厄介なお荷物です。



マイワシはプランクトン食の魚なので、口を開けたまま泳いでろ過摂餌する。庶民的な魚としてよく知られているが、近年の漁獲量は少ない。



カタクチイワシは口が深く切れ込む。煮干しやチリメンの原料として重要。近年ほとんど獲れていなかったが、2020年秋には大発生した。



カサゴはテトラポッドの隙間に多く、ガシラまたはガシとも呼ばれる。小魚やエビなどを食べ、大きくなると30cmを越える。卵胎生で12~1月に仔魚を産む。身は上質で、煮つけに適する。



ボラは大きくなると50cmを超える。成魚でも何万匹もの大群が帯状に連なることがある。淡水域に入ることも多く、よくジャンプする(下)。水のきれいな水域のものは刺身にできる。魚食性の動物の重要な餌となっている。



マアジはよく知られた食用魚。成長すれば40cmになるが、釣るのは豆アジくらい。



コトヒキの体には特徴的な黒帯や黒斑があるので、見間違えることはない。夏から秋に河口域で幼魚が見られる。成魚になると30cmくらいになる。

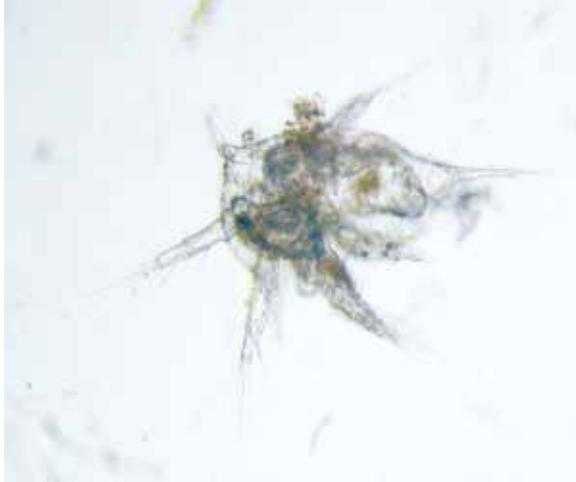


イソギンポは10cmほどになり、石積みの隙間になどに生息する。頭の上には海藻のような皮弁があるのが特徴。体には鱗がない。観賞魚として飼育されることがある。

イシダイは磯釣りのターゲットだが、幼魚はサンバンウと呼ばれ、内湾でも見られる。秋に15cmほどの個体が釣れる。成魚はウニやサザエを食べるが、幼魚はゴカイ類を好む。

海のプランクトン

海には淡水と同じようなケイソウやケンミジンコなどのプランクトン以外に、カニやフジツボ、ヒトデ、ホヤなど様々な生物の幼生がプランクトン生活しています。しかし、近年ではプランクトンネットを引いても、ほとんど何も入らない状態になってきています。



フジツボ類のノープリウス幼生。尾角がはつきりしている。成体からはかけ離れた形態。



ヤコウチュウは直径1mm内外の球形。凹溝の底部に口がある。刺激を受けると発光する。近年は少ない。



ケンミジンコの一種(右)とそのノープリウス幼生(上)。春の一時期多量に発生するが、すぐに消失する。魚類の大好きな餌となる。



ケラチウム属の一種はケイソウの仲間。よく似た種類が多い。



ヤムシの一種
は毛顎動物
門に属する。
側面と尾に鰓
があり泳ぐ。
長さ3cm。種
の同定は難し
い。



①



シュードニッチャ属の一種は細胞の先端で連結して槍状の群体を形成する。写真は2細胞だが、数個の細胞が繋がることもある。



コシノディスクス属の一種は扁平な円盤状のケイソウの仲間。よく似た種類が多い。



②



キートケロス属の一種。ケイソウの仲間で、種類は多い。



③



釜揚げシラスに含まれるカニ類のザエア幼生(左)。長い額棘と背棘が印象的。種類によって異なるが、ザエア期だけで1~3回脱皮して、ややカニらしいメガロパ幼生(右)になる。メガロパ幼生はまだ腹部を折りたたむことはできないが、ハサミ脚や歩脚があり泳げる。もう一度脱皮すると稚ガニになる。

よっかいちの海藻

海藻は興味の対象になりにくいですが、食用になるものもあり大切な存在です。海藻は水質の変化に敏感なので、黒海苔のような内湾性の種類は養殖できなくなり、アカモクなどの外洋性の種類が増えています。



春、テトラポッドの周りを埋めつくすアカモクのジャングル(左)。本種は1月頃から一気に成長し、5mほどになる。葉のつけ根は円柱状の気泡になる(上)。茹でれば食用となる。2014年頃から増えた。



ホンダワラはアカモクに似るが大きさは1.5mほど。気泡は丸く、成長すると上部の葉は小さくなる。



マクサは寒天の原料になるテンガサ(天草)の代表種。低潮線より深い場所に生育し、枝は規則正しく羽状に分かれれる。



ムカデノリは25cmほどになり、潮間帯下部から潮下帯に生育する。形態には変異が多い。茹でると海藻サラダとして食用となる。



ミルは30cmほどになり、低潮線から潮下帯に生育する。体は緑色の円柱状で、叉状に枝分かれして、全体は扇形になる。



フクロノリは潮間帯下部から潮下帯上部に見られ、直径10cmほどになる。体は薄い膜状の袋で、凸凹した球形になる。



ヒトエグサは20cmになり、潮間帯上部の岩につく。細胞が一層の平面に並ぶ。黒海苔に代わりアオサの名称で養殖される。



ワカメは誰でもよく知っている海藻。長さは1.2mになる。褐色をしているが、茹でればさっと緑色になる。海藻は全体から水を吸収するので、茎部の断面(上)には維管束がない。2017年頃より増えている。



ショウジョウケノリは20cmになり、体は細い糸状。潮間帯下部の岩や他の海藻に付着する。